The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Hamed Abdel-Samad, Integration. Ein Protokoll des Scheiterns,München 2018.（ハメド・アブデル＝サマド『統合：挫折の記録』、ドレーマー、2018年）
Author(s)	金, 泓槿
Citation	Sprache und Kultur. 2022, 41, p. 63-67
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87548
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書 評

Hamed Abdel-Samad
Integration. Ein Protokoll des Scheiterns, München 2018.

（ハメド・アブデル＝サマド『統合：挫折の記録』、ドレーマー、2018年）

金 泓槿

本書は、移民者とのインタビューや移民当事者である著者の経験に基づきながら、ドイツ社会における移民問題の原因を探り、移民統合を成し遂げるために必要な方策について提言する。13章から成る本文は、その構造と内容から大きく3つに分けることができる。本稿では、第1章から第3章、第4章から第11章、第12章から第13章に分けてその内容を紹介する。

まず、第1章から第3章までで著者はこれまで行われてきた調査手法の問題点を指摘する。移民の統合に関する一部の調査を挙げ、そこで用いられた方法では実態を把握できないというのである[1)]。例えば、言語能力や学力、就職率のような尺度で統合の程度が測られているが、9.11のテロリストで、犯行前までハンブルク在住であったムスリム移民者は高度な教育を受け、むしろそれらの基準を十分に満たしていた。また、移民者を対象とした統合に関する意識調査や信頼関係が築かれていない対象者とのインタビューの結果も、監視社会にあるムスリム移民者たちは、たとえ匿名性の高い調査であっても、真実を語らない場合が多く、実態が反映されていないという。例えば、イスラムの律法に触れたとして、暴行等の被害にあった人たちでも、信心深い家庭の出身者の場合、宗教とそれによる弊害との関連性を認めないことが挙げられている。それに対して本書は、イスラム研究者である著者のムスリム社会の実態を踏まえた調査と独自の視点からこれまでとは異なる視座を与えてくれる。なお、ドイツ社会への定住に至るまでの著者自身の経験についてもここで述べられているが、それについては後述する。

続いて、第4章から第11章では、著者がムスリム移民者や難民たちとの長期に及ぶ対話を通じて得た具体的な事例を紹介しながら、ドイツ社会が移民者との統合に「挫折」している原因を分析している。その原因の一つは、他ならぬムスリ

ムのコミュニティが彼ら自身の自由と自己決定権を侵害していることである、と著者は説明する。ゲットー化された、いわゆる通行禁止区域No-Go-Areaやベルリン＝ノイケルンBerlin-Neukölln の例で見られるように、ほとんどが移民の背景を持つ生徒で構成された学校の閉鎖的な環境は移民者と受け入れ社会との断絶を生む。さらに、所属感を求める移民者たちはイスラムの秩序にこだわり、急進化しやすい。そのような環境では、特に女性は、ヒジャブを被ることや純潔を強要されるなど、自己決定権を行使することができず、こうした事情によりドイツ社会の価値基準が通用しない平行社会の問題が深刻化しているのだというのが著者の見解である[2)]。また、多様性尊重を重視するあまり、かえって受け入れ側のドイツ社会において無関心が蔓延している現状も取り上げられる。著者は第10章「ブルキニはジンテーゼになれない」で、自由と束縛の間の妥協は存在し得ないと主張し、ドイツの基本法が定める自由に対する、宗教を理由とした例外的取り扱いが増えている現状に警鐘を鳴らす。中立性という観点から疑義のある、教師や裁判官の執務時のヒジャブ着用をめぐる議論や、ノイスNeuss市で豚肉の使用を問題視するムスリム移民者の反対によって、伝統的なソーセージ料理であるボックブルストBockwurstの販売が取りやめられたことなど、多様な事例を紹介することで、ムスリムとの衝突を避けるために、寛容を装い、ドイツの保証する自由と基本法が歪曲されることを黙視するのは民主主義の維持をも脅かしうると警告している[3)]。

第12章から第13章では統合にかんする著者の提言と未来像が述べられている。特に、移民者の統合を成し遂げるために各行為主体（アクター）がなすべきことを提案した第12章「統合は可能である―ドイツのための新たなマーシャルプラン―」に著者の主張が集約されている。行為主体には国家、司法、警察、経済界、学校、市民社会、左翼、右翼、メディア、イスラム団体、キリスト教会、移民研究者、難民が挙げられ、それぞれに対し提案が行われているが、本稿では受け入れ社会側と移住者側の2つの視点から、その主要な内容を紹介する。受け入れ社会側が努力すべきこととして、国家は通行禁止区域のような公権力の行使が及ばないエリアが生じないよう、治安対策を強化すべきであり、そのためには警察の待遇を改善しなくてはならない。また、ムスリムの統合を促進するためには、イスラムの政治的な影響力を抑えるべきであると述べられている。司法は、信仰の自由が他の条項に優先することは許されず、人間の尊厳と個人の自由が宗教集団の

権利より優先されるという点を明確にしなければならない。加えて、統合において核心的な役割を果たす学校は、ムスリムの生徒たちが抑圧されない、オープンな討論を通して、家父長的かつ権威主義的秩序よりも、自由かつ民主主義の価値にもっと魅力を感じるように導くべきである、と著者は説く。また市民社会はムスリムを敵対視することも、彼らに寛容を示すことも、差別したり、特権を与えたりすることもなく、同等な権利を持つ市民として接するべきである。著者の考えは、左翼はムスリムを保護の対象ではなく、同等な存在として捉え、右翼はすべてのムスリムが潜在的なテロリストではなく、その多くが民主的で、ドイツを愛している人たちであることを認識すべきである、というものだ。さらに本書では、メディアと移民研究者においては中立的な立場で、事実をありのままに描写すべきであるという点が強調される。

統合への努力は受け入れ社会だけではなく、移住者の側にも求められる。著者はイスラム団体に対しては、ドイツ基本法の枠組みに則って構成員の権利を代弁する必要があり、ドイツ社会で認められるためにはドイツの価値規範を尊重する態度が重要であると説く[4)]。また、ドイツに来た難民個人に対しては、自由と民主主義を享受し、家族にも等しくそれを許容すること、ドイツ語の習得およびドイツ法を順守することが肝要であると強調する。

2010年に公刊され日本でも話題となった、ティロ・ザラツィンThilo Sarazzinの『自壊するドイツ[5)]』をめぐる激論に見られるように、移民の統合の失敗とそれがドイツ社会にもたらす負担への不安が広がりをみせている。そうした中、自ら移民の背景を持つ著者が移民の統合について語っているという点で注目を浴びたのが本書である。著者であるハメド・アブデル＝サマドはエジプト出身のドイツ人政治学者・言論人であり、ムスリムであるにもかかわらず、イスラム主義が政治的に道具化されていることを批判する多数の著作[6)]で有名となった人物である。23歳でカイロからドイツに移住した彼はアウクスブルク大学で政治学を専攻し、ユネスコでの勤務を経て、エアフルト大学およびミュンヘン大学のユダヤ史・ユダヤ文化研究所Institut für Jüdische Geschichte und Kulturで研究・教育に従事した。彼はドイツ語圏における著名なイスラム有識者であり、2020年までドイツ・イスラム会議Deutsche Islam Konferenzの委員でもあった。しかしイスラム主義を批判する著作を発表したことで、イスラム原理主義者から殺害の脅迫を受け、2014年からは警察の保護を受ける身となり、現在はフリーの立場で著述や

SNS、YouTubeチャンネルなどを通してイスラム主義への批判やドイツ社会への提言を発信し続けている。しかし、彼が疑問視しているのは、宗教を理由とした個人の自由の侵害であり、イスラム教を全面的に否定しているわけではない。加えて、反イスラムに傾く「ドイツのための選択肢Alternative für Deutschland」のような極右政党に対しても批判的なスタンスをとっている。このような独特な立場から、これまでの他の研究者には見られない、ドイツのムスリム社会にかんする精密な描写や、移民問題をめぐるドイツ社会に対するユニークな視点が読者に提供されるのである。その一例が、多様性の尊重や寛容を重視する傾向がもたらす負の側面への指摘である。ドイツ社会が移民との統合に躓いた理由が、統合を拒否するムスリムの側だけにあるのではなく、寛容を装った妥協、すなわち目前の葛藤を避けるためにドイツ社会内でイスラム主義を許容しているドイツのマジョリティ社会の側にも責任の一端があるとの彼の主張は説得力があり、移民の統合問題に、より立体的かつ俯瞰的な視点を与えている。

しかし、いささか理想論に偏った提案のみで、統合に向けての段階的なビジョンを提示していない点は本書の限界として指摘せざるを得ない。統合とは状態Zustandではなく、過程Prozessとして捉えるべき[7]であり、目標の設定だけではなく、それに向けての具体的なプランが提示されなければ建設的であるとはいえない。特に現在、ドイツ社会でのムスリム移民者集団は規模が非常に大きく、「民族化Ethnisierung」[8]の兆候も著しいため、急進的な政策は多くの反発に直面する可能性が高い。著者自身、過程としての統合について言及[9]してはいるものの、本書で主張されているのは受け入れ社会であるドイツの価値基準に移民者が合わせる形ということになる。それは結局同化Assimilationをゴールとした目標設定にとどまっている印象を与える。第12章の提案で、これをどうすれば現実的な形にするか、予想される反発にはいかに対応できるか、どのような順番で実現していけばリスクを減らせるのかについても著者の見解が述べられていたならば、より示唆に富んだ内容となっていたのではないだろうか。

ただ、こうした問題点が見られるものの、移民者との統合という課題が投げかける問題を、ドイツの例に基づいて共生のあり方について考える機会を提供してくれる。本書は、ヨーロッパの情勢に関心のある人々にはもちろん、移民と共生する日本社会の未来像を構想している多くの人々にも示唆を与えてくれることであろう。

註

1） Vgl. Hamed Abdel-Samad, *Integration. Ein Protokoll des Scheiterns*, München 2018, S.27 ff.
2） Vgl. Abdel-Samad 2018, S.111 ff.
3） Vgl. Abdel-Samad 2018, S.194 ff.
4） Vgl. Abdel-Samad 2018, S.255 ff.
5） Thilo Sarazzin, *Deutschland schafft sich ab*, München 2010.
6） Hamed Abdel-Samad, *Der Untergang der islamischen Welt. Eine Prognose*, München 2010; *Der islamische Faschismus. Eine Analyse*, München 2014.
7） Vgl. Friedrich Heckmann, *Integration von Migranten. Einwanderung und neue Nationenbildung.* Wiesbaden 2015, S.82.
8） エッサー (2008) は、移民者集団の規模が大きくなり、組織的活動が活発に行われると、移民者集団内の期待効用が大きくなり、民族グループ内で受け入れ社会との内在的な境界線を引く現象である民族化Ethnisierungが現れると説明している。Vgl. Hartmut Esser, Assimilation, ethnische Schichtung oder selektive Akkulturation? Neuere Theorien der Eingliederung von Migranten und das Modell der intergenerationalen Integration, in: Frank Kalter (Hrsg.), *Migration und Integration,* Wiesbaden 2008, S. 91 u. 93 ff.
9） Vgl. Abdel-Samad 2018, S.24.